南極半島の島巡り

米道綱夫

南極半島の島巡りはアルゼンチンの最南端の町ウスアイアから約1000km離れた南極半島の島々を巡る８泊９日の旅である（**図１**）。日本からのツアーもあるが、スペイン語が達者ならウスアイアの旅行会社で南極探検船に乗るのが一番安く行ける。私がウスアイアの街に着いたのは2016年１月７日でみぞれが降っていたが現地の季節は夏であった。

ここで南極探検船ウスアイア号に乗船した（**図２**）。この船は元アメリカの測量船で海図などの作成に携わった船だ。船員は主にアルゼンチンの方で、それ以外に南極の地理・探検の歴史・気象・鳥・動物などの講義をしてくれる講師が５人乗っていて揺れる船の中で講義をする。60人の日本人乗客の半分ぐらいは船酔いを抑えるべく黙りこくっている。船が木の葉のように揺れるドレーク海峡通過中も講義はある。船の揺れ方は尋常でない。船室の窓を見ると空が見えていたかと思うと海水ばかり見える。船室はドアーに鍵がない。緊急の脱出に対応できないからだ。廊下の手すりには１ｍごとに吐出用のビニール袋が吊り下げられている。私もお世話になった。１日目の講義でびっくりしたのはナンキョクアジサシの群れの中に時折キョクアジサシがいるとのことだ。70000kmも移動するのだ。夏は南極で過ごし冬になるとパタゴニアで暮らす。次はリンダ講師が海獣の話をした。南極の半島周辺部にウェデルアザラシ・ナンキョクオットセイ・ミナミゾウアザラシの３種類が生息している。ウェデルアザラシは人間を恐れない優しい性格で人間が来たら顔を向けるという。また歌を歌うとも言われ16種の声を持っている。狩猟で激減したが最近狩猟禁止になり数が増えてきている。ナンキョクオットセイは小さくてよく顔を上げている。ミナミゾウアザラシは大きいことと顔が象に似ている。

図１：南極半島への航路。

図２：南極探検船ウスアイア号2600トン。

このほかにヒョウアザラシ、カニクイアザラシがいる。カニクイアザラシは　氷山の付近に生息している。９日はローリングやピッチングを何度も繰り返していたが講義は続いた。船酔いがひどく全く集中できなかった。船はやがて穏やかな南極半島の突端ポートロックロイ（南緯64°49西経63°29）に10日午前６時30分に着く。ここは1904年にフランスが基地を開設し、1911～1931年まで捕鯨基地として捕鯨船が利用、その後イギリスが大気、コケ、動植物の研究を行った。また1943年にイギリスが郵便局を開設した。南極から郵便が出せるが、ロンドン回りで配達されるので郵便は数ヶ月先に届く。今イギリスの研究施設は博物館とお土産の店になっている。またこの建物の周りはジェンツーペンギンの営巣地でもある。

11日はゾディアック（**図３**）で氷海・氷河・遊覧で鯨やアザラシを見るものだった。南極半島は19世紀後半から20世紀半ばまで捕鯨基地として使用された。捕鯨基地になる前はアザラシ猟であった。アザラシの乱獲によって生息数は激減したため、狩猟禁止になった。船外機は日本の YAMAHAも使われていた。遊覧の後チリの観測基地（**図４**）を訪れた。この基地は海軍と空軍によって運営され、チリの大統領ゴンザレス・ビデラの名がつけられビデラ基地と呼ばれている。基地の中に博物館とお土産屋さん

があり、チリの通貨ペソとドルが使える。基地は空軍と海軍で運営されている。ジェンツーペンギンの営巣地でもある。

ジェンツーペンギン（**図５**）は体長50〜70cm体重７kgオレンジ色のクチバシ、後頭部の白色が特徴である。抱卵するジェンツーペンギン、小石を集めて40〜50cmの円形の巣を作り、オスメス交代で２個の卵を約１ヶ月間温める。またオス・メス揃ってお辞儀をし始めたら、つがいが形成されたと見て良い。

12日はデセプション島（**図６**）南緯64,51西経62,54へ航海した。この島は活火山の頂上部分が輪になって残ったような島で一部切れ目があり、この狭い切れ目をネプチューンベローと呼んでいる。船の難所でこの切れ目の下には多くの捕鯨船や南極探検で遭難した船が沈没しているという。ここを通過するとき私たちは操舵室に入れてもらった。船長と一等航海士がゆっくりと船を進めた。左舷側の海を見ると沈没した船のマストのてっぺんが水中にあるのが見える。この島もゾディアックで上陸した。1900年半ばまで捕鯨船の避難場所や鯨の解体場所として島が使われ、その時の建物が今でも残っている。

私たちはこの島の外輪山部分にあたる所を登り、火口をみた。その後ヒゲペンギン・ジェンツーペンギンとミナミゾウアザラシのハーレムを見るために山の中腹に移動した。これらの繁殖地は200m離れているが保護区になっていてこれ以上は近づけない。気温は４℃で暑い。防寒着の下は汗びっしょりだ。600mmの望遠レンズで見るとジェンツーペンギンとヒゲペンギン（**図７**）が同居している、海岸近くにミナミゾウアザラシのハーレムがあった（**図８**）。

ヒゲペンギンは体長75cm　体重８kg首の部分にある黒いスジ状の羽毛が特徴で一見黒い帽子をかぶっ

図３：ゾディアックは10人のりのゴムボート。

図４：チリの観測基地。

図５：ジェンツーペンギンの抱卵。

図６：デセプション島　各国の捕鯨基地があった。

図７：ヒゲペンギンの親と雛。

図８：ミナミゾウアザラシのハーレム。

ているように見える。南緯54度〜64度の南極半島や大西洋の島々に生息する。11月下旬から12月初旬に２個の卵を産み、オスメス交代で35日間抱卵１月初旬にヒナがかえる。

ミナミゾウアザラシは南極半島と亜南極の島々に生息する。体長はオス4.2m 体重5000kg メス2.7m 2000kgオスは12歳まで単独の雄として暮らし、13歳〜14歳で初めて20頭から50頭のメスのハーレムを作る。オスは交尾を繰り返した後は体重が半減し、海に帰りその生涯を終える。

私たちが訪れた季節は鳥獣たちにとって繁殖期であった。それゆえペンギンの幼鳥や卵を狙う鳥たちもすぐそばで生活している。オオフルマカモメ類（**図９左**）とズグロムナジロヒメウ（**図９右**）だ。上陸地点に戻るまでに鯨の骨（**図10左**）の残骸を見た。また南極が熱帯にあったという証拠の木の化石も見た。最後は海岸地帯で温泉が湧いている場所に行き、スタッフが黒い砂を掘って３×１mのお風呂を作ってくれた（**図10右**）。私も入ったが十分暖かかった。

13日・14日は再びドレーク海峡の横断だったが船酔いはしなかった。午前の講義はアレ・ハンドロ氏の南極探検の歴史の講義だった。最初の南極探検は1897年のベルギー人によるもので南緯71度まで到達している。現在南極大陸には29カ国が基地を設けている。続けてリダさんの氷についての講義があった。淡水からの氷と海水からの氷があり、南極の冬になると2000万平方km、南半球の８％がこの氷に覆われる。午後はフェリエッタさんが鯨について講義、鯨の祖先は有蹄類で5000万年前に現れたパキセトス、2000万年前に尻尾がひれに変わる。

14日は午前中ペンギンや気象の最終講義があった。南極海の海水温度が上昇している。このままだとペンギンの餌のオキアミが生息できなくなる。今アデリーペンギンは寒さを求めてより南に巣を作るようになった。午後はBBQパーティーだった。

15日９時船医のダニエルさんの簡単な健康診断を受け、セルジオ船長以下38名のスタッフの祝福を受けて下船した。

＜**よねみち　つなお**：本会会員＞

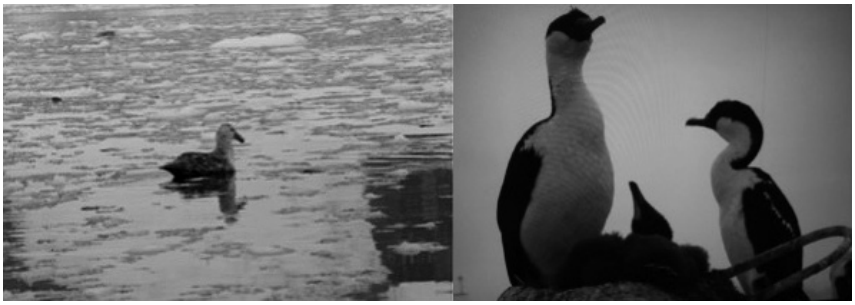

図９：オオフルマカモメ類（左）とスグロムナジロヒメウ（右）。

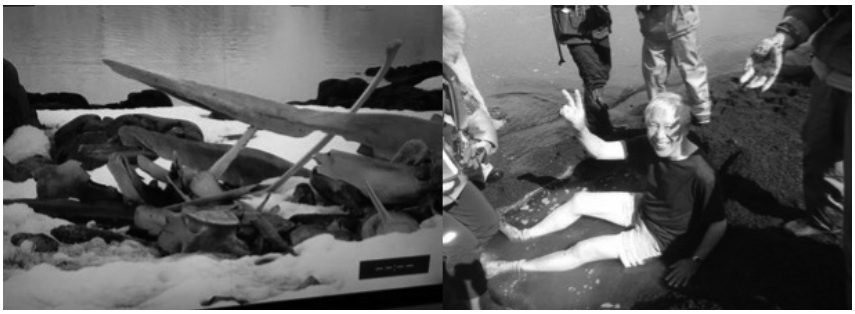

図10：鯨を解体した後の残骸（左）温泉につかる筆者（右）。